誰でもわかる　がん講座・120　肺がんに対する手術について

肺は、右は上中下の３つ、左は上下の２つの「肺葉」で分かれており、この肺葉の単位で切除する「肺葉切除術」が肺がんの標準術式となります。小型で端の方にある病変には、切除範囲を狭めた「部分切除術」が選択されることもあります。

肺癌に対する手術のアプローチ法には、開胸、胸腔鏡、ロボットの３つがあります。開胸手術は大きく切開して胸の中を直接見て行う手術なのに対して、小さな孔を複数か所あけて、そのうち1か所からカメラを挿入し、その映像をモニタ画面で見ながら器具を操作して行うのが胸腔鏡手術です。開胸よりも痛みが少なく、身体への負担が軽減され、早期回復が望めます。ロボット手術は胸腔鏡手術のさらに進化した方法で、4本のアームを備えたロボット手術システム「ダヴィンチ」を用いて行います。カメラや器具を小さな孔から挿入することは胸腔鏡手術と同じですが、それらをロボットアームに固定して外科医が精密に操作することが異なります。ロボット用の器具の先端は非常に小さく、関節で曲がるようにもできているので、操作性がよく細かな繊細な作業が可能となります。そのため出血量や合併症の減少につながると言われています。当科ではこれら全てのアプローチ法に対応しておりますので、肺がん手術についてご質問等ありましたらお気軽にご相談下さい。

呼吸器外科　主任医長　鈴木　久史